

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣 報告書

提出日：2012年4月4日

### 派遣生の基本情報

氏名：浅間 哲平

旧所属先：人文社会系研究科欧米系文化研究専攻フランス語フランス文学研究室

派遣形態：PD

研究課題名：マルセル・プルーストにおける蒐集家像についての研究

### 派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

フランス、パリ、フランス国立図書館

(2) プログラム適応期間

出発日：2011年1月1日

帰国予定日：2011年12月31日

総日数：365日

### 主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

フランス 20 世紀を代表する作家マルセル・プルースト (1871-1922) の描く蒐集家像が、19 世紀の文学の歴史に負っているものを明らかにするという目論見のもと、その手がかりとして主著『失われた時を求めて』を準備するためにプルーストが参照した作家ゴンクール (兄エドモン：1822-1896、弟ジュール：1830-1870) について調査することが当初の計画の概要であった。

(2) 実際に達成された成果

蒐集家という文学的テーマの上でゴンクールがプルーストに与えた影響はどのようなものであったかを明らかにするため、ゴンクールの日記を読むこと、またそこで言及されている蒐集家とそのコレクションについてフランス国立図書館の資料を利用し一次資料にあたりながら整理すること、以上がこの派遣によって達成された成果である。特に、プルーストのゴンクールへの関心が高まっていたと思われる1892年から1895年にかけての時期を中心に研究を遂行した。プルーストが参照したゴンクールの日記はシャルパンティエが1887年から1896年にかけて刊行した全9巻のものであるが、1956年刊行のRobert Ricatte による校訂版を併せて参照し、国立図書館所蔵の美術雑誌・新聞 (例えばGazette des

Beaux-ArtsやLa Vie moderne) で関連の項目を調べることで、当時の文化史的文脈をより詳細に調査することができた。

### (3) 今後の研究展望

今回の派遣により得られた資料および知見は、現在準備中の論文で発表することを予定している。現在進行中の研究に目途がたった時点で、日本フランス語フランス文学会でその成果を発表したい。プルーストはゴンクールの芸術観に対して否定的であり、特に芸術作品の蒐集には反対であったとされているが、プルーストの作品には随所に蒐集文化へのめくばせがあるように思える。ゴンクールの日記を詳細に読み直すことが、プルーストの作品に新たな光をあてる展望へと繋がると考えている。